

CIF (Critical Issues Forum) 研修報告 (3年7組 溝口祥帆)

私は、3月28日～4月2日の旅程で、アメリカ・モンレーで3月30日・31日に開催されたCIF (Critical Issues Forum) に参加しました。今回は、「核兵器禁止条約」というテーマで、アメリカ、ロシア、日本から17校、約40名の高校生たちがこのプロジェクトに参加し、核兵器廃絶にむけてのプレゼンテーションや意見交換を行いました。

私は、このプロジェクトを通して学んだ事が3つあります。1つ目は、核兵器廃絶に向けた様々なアプローチです。各校のプレゼンテーションを聞いて、核兵器禁止条約や核兵器に関する世界各国の動きを学ぶとともに、日本の他県の発表によって、日本の立場や考え方も知ることができました。参加者がこの条約について調べる中で、問題点を発見し解決策を考え出しており、同世代に条約の重要性を訴えるためのスライドショーやポスターを作ったり、自分の高校を“nuclear free school”と名付け、学校全体で平和イベントを開催したりするなど、世界各地で様々な工夫を凝らして核兵器廃絶に向けたアクションが起こっていることに、感銘を受けました。今回得た様々なアイデアは、今後の自分の活動にも取り入れていくとともに、多くの人と共有していきたいです。また、普段はそういったことに目を向けない学生が、この条約について学習し自分の意見を発表することにも大きな意義があると感じました。CIFのようなイベントに、より多くの生徒が参加し、学んだことを周りの人々に発信することで条約に関する認識や関心も高まるのではないかと思います。

2つ目は若者の意見交流、文化交流の必要性です。私は、他国の学生たちとの交流やホームステイファミリーとの会話の中で、文化の違いを知ったり、共通点を発見したりする事ができました。特に印象に残った話は、ロシアから来られた教師の方と話した、原子力発電所のことです。その学校があるロシアの街でも原子力発電所が稼働しており、チェルノブイリ原発事故や福島原発事故があっても関わらず、稼働を続けているのが不安だとお話されました。そして、核兵器にはもちろん反対しているけれど、核の平和利用にも反対だと、意見を共にしました。ロシアでも日本でも同じような問題があることを認識し、それに対して同じような考えを持っている人がいることも実感しました。また、共に生活していく中で、国ごとの学校の風習の違いも知ることができました。異なる背景を持った人たちと意見を交換したりお互いの文化を分かち合ったりすることは、自分の視野を広げ世界に目を向ける重要な機会になると思います。

一方で、プレゼンテーションや意見交換の場で自分の考えや核兵器禁止条約の重要性を発信する事ができ、それに対する感想もいただきました。

3つ目は国際協力の重要性です。世界規模の問題を解決するためには、世界規模の協力を要しますが、CIFはその基盤を築ききっかけとなりました。2日目にKeynote Talkをされた、Susan Southard氏は、長崎の被爆者である谷口稜暉さんに関する著書を執筆されており、私も関わりが深かったことからたくさんお話をさせていただきました。これから、私たちに何が出来るかを、連絡を取り合いながら考えていきたいと考えています。また、GSⅡで製作した平和副教材をアメリカの方とロシアの方に見て頂き、高評価を頂くとともにアドバイスも頂きました。こういったところで国を超えた協力をする事ができたと感じました。今回、共通の目標を持って集ったアメリカ、ロシアの学生たち、日本全国の仲間たちとの友好関係を大切にし、その後のお互いの活動についても情報を共有していきたいと考えています。国境を超えた協力をしていくことは、市民社会を活性化させるために必要なもので、その点においてもCIFは非常に有意義だったと感じられました。

CIFでは、発表自体は一人で行ったものの、準備は一人でしたわけではありません。多くの方のボランティア精神と優しさのおかげで、私は今回の発表を無事に終える事ができました。旅自体もホストファミリーを始め、多くの人の支えのおかげで成り立っていました。たくさんの人の優しさに触れられたプロジェクトだったと思いました。今度は、自分がこの旅で学んだことを、お世話になった方々に還元していきたいです。もちろん今後の平和活動やGSⅢの研究にも生かしていきたいです。多くの

人に今回学んだことを伝えていながら、これからも国際協力の輪を広げていきたいです。(文責：3年7組 溝口祥帆)



(ホストファミリーと)



(左：Susan Southard氏)



